こころの星空

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こころの星空

【Ｎコード】
Ｎ４７００Ｑ

【作者名】
大輔華子

【あらすじ】
ごはんライス先生の新春課題パート？におこたえしての投稿です。
今回の課題は、落語の三題噺に倣って、お題を二人で各々二題づつ出しての四題噺の小説バージョンです。
ごはんライス先生から出されたお題は、「おっぱい」と「中国」。
私からは、「おしろい」と「お星さま」。
この四つを題材にして一つのお話にしました。

三題噺でいうところの『題』とは、関連性のいかにもなさそうな「場所・人・もの」を、寄席にみえたお客さまがその場で指定するものですが、噺家さんはただ単に噺の中に「語句」を入れればよし、とするものでもないようです。

きちんと「テーマ」や「設定」に組み込まれていなければ「NG」だ、と聞きました。

そのあたりが私の軽い頭をぎんぎんに悩ませたところで、うまくそうなっているか、ちょっと心配です。

「中国」と「お星さま」は物語の舞台とテーマの中心になっていますが、「おっぱい」と「おしろい」は、人と人との絆を表したもので、その点ちょっと弱かったかな、とも自分で感じました。

どうやら手放しに「整いました！」とはいかないようです。

【華】

ぽんちゃんのはじまり

松下華実のニックネームはぽんちゃんである。何故ぽんちゃんなのかと言うと、話は簡単である。彼女は十代半ば頃『胃下垂』の傾向があって、お腹が普通の人よりポンと出ていたので、仲間友達から親しみを込めてそう呼ばれていたのである。決して『でぶ』っと出ていたのではない。可愛らしく『ポン』っと出ていたのである。念のため。

ぽんちゃんの両親はともに生物学者で、ジャイアントパンダの生態研究のために数年間中国に滞在し、「大熊猫繁育研究機関」で働いていた。いよいよ所定の研究を終えて日本へ帰国する二ヶ月前、ぽんちゃんは滞在先の中国四川省成都市で産声をあげた。

しかし、それはぽんちゃんの悲劇の始まりだった。母親はぽんちゃんを帝王切開で出産したが、産後縫合部分より大量の内出血があり、出血性ショックで帰らぬ人となった。失意の底に沈んだ父親はその後、まだ首もすわらない彼女を抱え日本に帰国する『はず』だった。

しかし、そこにぽんちゃんの人生の第二の決定的悲劇があった。空港で父親がぽんちゃんを籠に寝かせたまま用をたしているちょっとの隙に、彼女は見知らぬ中国人に連れさられた。これが彼女の母親に次ぐ父親との別れとなった。

だから、ぽんちゃんは両親の顔をまったく知らない。

極悪人　歹徒龍（ダイトゥロン）

それからぽんちゃんは車で何時間もかけて西へ西へと連れられて行った、着いた先は、山深い中国の西端に位置する新疆ウイグル自治区のカシュガル地区。彼女はそこで『ミコ』と名付けられ、『タコ部屋』のようなところで他の子供たち十数人とともに育てられた。

連れ去った一族のリーダーは、地元では極悪非道なことで知られる男で、俗に歹徒龍（ダイトゥロン）と呼ばれる者だった。彼はややスリムな体型だが、上背があり肩幅も広く、いつも素顔を隠すようにサングラスと黒いマスクをしていたので、その風貌から会うものにある種の威圧感を与えていた。彼は仲間と共同して、生まれて間もない子をさらっては毎年数名の子供を中東地域のテロリストなど人身売買の仲介者へ高価な対価を得て引き渡していた。いわゆる人でなしの人身売買である。

最終的に、売られた子はその仲介者の手によって地域の富豪などへと転売され、彼らの慰安婦兼奴隷としての生活を強いられることとなる。

子供たちは、全員が左の胸に、ジャイアントパンダの絵模様のタトゥーを彫り込まれていた。彫り込むのが素人のため、その絵はお粗末極まりないもので、乳頭をパンダの鼻に見立ててその上方に黒い目と黒い耳を二つづつ描いて丸で囲んだようないい加減なものである。幼児の落書きのようなこれを彫り込まれた時点で、子供たちはすでに奴隷の烙印を押されたようなもので、人生の大半の自由を奪われたに等しい。また、このタトゥーは歹徒龍（ダイトゥロン）一族の商標のような役割を持っていて、買い取った客から不要になった子を無償で引き取り、別な客に再販し、一人の子で何回もの報酬を得るための目印にもなっていた。

子供たちは、昼間屋外で遊んだり周辺を自由に歩き回ることが許されていたが、誰もそこから逃げ去ろうとしない。皆、ぽんちゃんと同じく、生れてまもなくさらわれた子ばかりだったので、最初のうちは世に両親が存在することすら知らない。のちに知ることがあっても、親というものの何たるかがわからない。だからさらわれたことにも被害者意識はなく、逃げるなどということも思いつかないわけである。辛ければ泣く。楽しければ笑う。他に比較するものは何もない。ただそれだけのことである。

少女サリと星空を……

ぽんちゃんは明るく積極的な性格であったので、『タコ部屋』の子供たちに人気があった。

子供たちの中に『サリ』と呼ばれる西洋系の顔立ちの綺麗な女の子がいた。彼女はぽんちゃんより約半年前にここへ入れられた子であったが、特にぽんちゃんのことを妹のようにかわいがり、良く身の回りの世話をしてくれた。

「ミコ。あなたは強いのね。何があっても泣かないし、いつも笑顔で羨ましいわ」

サリはそう言って時々ぽんちゃんの頭を撫でてくれた。ぽんちゃんは嬉しかったが、サリの悲しげな目を見るのはあまり好きではなかった。

ある日、二人は夜遅く『タコ部屋』を出て、星空を見た。門限のあとに規則を破って外出したことに対する代償は、普段からどんな苦痛にでも耐えられるよう訓練させられていた子供であっても耐え難い仕打ちであり、ぽんちゃんは三日三晩全身の痛みと飢えによって体をぴくりとも動かすことができなった。しかし、その時、苦痛よりも彼女の心の中で優先した感情は喜びだった。二人で見た星空はとても綺麗で、それはぽんちゃんに大きな感動を与えてくれた。

サリは目を輝かせながら星の名を教えてくれた。

「本に載っていたわ。あれはプロキオンよ。あれがアルデバラン。それからあの一番に輝く星はシリウス。天の狼の星。北半球ではどこでも見える最高に輝く星よ。

ねえ。私たちのこと、いつもお星さまが見ていて味方してくださるのよ。

あとねえ。ええっと、もっともっと南に行くとカノープスって大

きな星が見えるらしいの。あの高い山を越えなきゃ見えないわ。いつかはあの山越えて、その星、見に行きたいなあ……」

「ふんふん、私も……」

その時のぽんちゃんは、わかったようなふりをしながら、満天の星と、闇に薄っすらと光を放つ山々を見ていた。

人買い　アジズ・オマル

年月が流れ、ぽんちゃんは十二歳になった。ある日、彼女は他の子供と一緒にさらに奥深い雪山の中へトレーラーのコンテナに入らされて連れて行かれた。そこではサーカスの猛獣が入るような檻に囲まれた空間に他の十数人の子供と一緒に入れられた。

その場所にいた一人の男は腕組みをしながらうろうろと檻の周りを歩き、突然ぽんちゃんを指差した。

ぽんちゃんは一瞬びくっとして、隣にいたサリの手を握った。

「この子がいい。あと、その隣の髪の長い子は北の山の弟のところへやろう」

ぽんちゃんとサリは順番に檻から出された。

――サリと一緒の生活もこれまでか……。

彼女と一緒に星空を見た思い出が一瞬ぽんちゃんの心に浮かんだが、彼女はそれを気持ちの中で握りつぶした。彼女にとって過去のことなどはどうでもいい。思い出など要らない。それが彼女の考え方であり、生き方そのものでもあった。

指を差した男はアフガニスタンのテロ組織リーダーのアジズ・オマル氏であった。彼はぽんちゃんを自分の慰安婦兼奴隷にするつもりはない。彼女にイスラム社会人としての付加価値を付けて更に転売するために彼女を『購入』したのだ。

こうして彼女たち二人はオマル氏とその親族のもとへそれぞれ身売りされ、ぽんちゃんは半年間穴ぐらのようなところでほとんど外出もままならない状態で生活させられた。その間彼女は、イスラム社会の習慣や宗教に関すること、お化粧の仕方、女としての立ち居振る舞いに至るまでのあらゆることを教え込まれた。

ぽんちゃんはこのような生い立ちであるから、中国語の一部とウイグル語、パシュトー語、ダリ語を理解し、話すことができる。

ぽんちゃん入国

その後オマル氏一派は新国家アフガン＝イスラム共和国の政府軍に捕らえられてしまい、ぽんちゃんは初代大統領ハーミド・カルザイ氏の父の姉の夫の前妻の養父の妹である中国人女性の友人、日本人のフリージャーナリスト女性に引き取られ、十三歳にして晴れて日本への入国を果たしたのだった。

ぽんちゃんはこうして日本人としての国籍を得た。松下華実という名はこのときに得た姓名である。生まれた時に果たして彼女が何と命名されていたのかは、記録にもないので誰にも知るすべもない。

ぽんちゃんは当然のことながら、当時日本語を全く話せなかったし義務教育も受けていなかったので、特別に中国人学校に三年間就学させてもらい、それで義務教育を修了したことになった。彼女はその間勉強をほとんどしなかったが、日本語だけはよく覚えた。

ところがぽんちゃんが中国人学校を卒業して約一ヶ月後、日本で育ててくれたジャーナリスト女性が北朝鮮のピョンヤンへ取材中に突然消息を絶った。その情報は外務省を通じて彼女のもとへ速やかに伝えられた。その後その女性は、ぽんちゃんの待つ本国へ再び戻ることはなかった。その時もぽんちゃんは意識してその女性と過ごした三年間のことを『過去のこと』として記憶の奥へとしまいこんだ。

ぽんちゃんは学校法人を保証人にアパートを借りて一人暮らしを始めた。そこで四年間アルバイトをしながら自力で通訳養成の専門学校へ通い、晴れて中国語通訳の資格を得た。

これまでのぽんちゃんの歩んできた人生は、まさに『波乱万丈』という言葉がぴったりである。

しかし、ぽんちゃんの性格は、そんな生い立ちにも拘らず、いた

ってポジティブ思考である。ぽんちゃんの得意なことは常に笑顔で、日本での七年間、彼女の周りにはいつも友達が絶えなかったし、心通じ合った友達は数えてもきりがないほどである。ぽんちゃんは偉い！

ぽんちゃんが四年間通いつめた専門学校では履修卒業後、通訳の資格を得た者の就職先を精力的に斡旋してくれた。

ぽんちゃんはある日、とある団体より採用を検討している旨の通知を受け、いよいよ採用面接に臨むこととなった。

就職面接

『生きもの生態研究協会』。その団体の名称は実に分かりにくいものだった。

名称も不可解ながら、周りが皆十階建以上のビルの谷間に位置するその団体の二階建てのビルは、かなり特異な雰囲気を醸し出していた。ぽんちゃんは、ガラス貼りの扉を開けて受付で用件を伝えると、すぐに脇の応接室へ通された。

しばらくして、四十歳前後のかなり体格の良い太った作業服姿の男と、対照的にひ弱そうな背広姿の若い男性が続いて入室してきた。太った大きな男が口火を切った。

「やあやあ。固くならないでね。どぞ、どぞ。座ってね」

その男の言葉は中国人が日本語を話す時のような、ややたどたどしい響きがあった。

面接官が名刺を渡すのも変だが、ぽんちゃんは太った大きな男性から差し出された名刺を見て「あっ」と小さな声をあげた。

『大熊猫繁育研究機関　日本支所　所長　司馬　剣』

ぽんちゃんは中国で十二年間軟禁されながら生活していた間、ほとんど自分の出生に関する情報を知らされることはなかったが、いよいよ檻に入れられて売りに出されるという時になって初めて、直々に歹徒龍（ダイトゥロン）の口から、彼女が成都の空港で拾われたことと、大熊猫繁育研究機関と現地で共同研究を進めていたらしい日本人の男が彼女を捜していたことなどを聞かされていた。

ぽんちゃんは、その自分を捜していた人が恐らく自分の父親だろうと思ったが、当時から彼を捜すつもりなど毛頭なかった。しかし偶然にも研究機関の日本の事務所の中国人らしい男を目の前にして、

彼女はある種言いようのない胸騒ぎを感じた。

「松下華実さんですね。実は私はすでにあなたの生い立ちを詳細に調べました。あなたが日本で『ぽんちゃん』と呼ばれていることも知っています。今回のプロジェクトについてはこれからご説明します。　あなたは、プロジェクト遂行のために必要とする、困難な二つの条件を完璧に満たしています。まず、通訳として、ウイグル語・パシュトー語・ダリ語をこなせるということ。こんなにマイナーな通訳はあまりいませんよ」

「あのう。マイナーな通訳って……」

ぽんちゃんはちょっと不愉快な顔をした。

――もしかしてこの人私のこと馬鹿にしてる？　私はれっきとした中国語の通訳なのに……。

司馬剣は彼女の心を見透かすように頭をかきながら済まなそうに付け加えた。

「いやあ。失礼。貴重な存在という意味です。他意はありません。あり得ない通訳、という意味です。なんでウイグル語なの？　パシュトー語ってどこの国の言葉？　ダリって誰だ？　って感じ。そうそう。君は貴重なんだ。ははは」

――こいつう。やっぱり私のこと馬鹿にしてるよ。

「ぽんちゃん。そして、君はもう一つの重要な条件を完璧に満たしているので採用することにしました」

「ええっ？　もう採用ですか？」

――でもいきなりぽんちゃんって。なれなれしいなあ。ところで、もう一つの条件って何？

イエティという生きもの

司馬剣は急に真剣な表情になった。
「君。『イエティ』って聞いたことある？」
「いえてぃ？　ですか？　どこの言葉でしょう」
「いやいや、言葉じゃない。ヒマラヤ山脈に生息しているといわれている『雪男』のことだ」
「はあ？」
――まさか生きもの生態って雪男の調査じゃないでしょうね。
ぽんちゃんがそう恐れた瞬間、司馬剣は彼女の思いに重ねるように言葉を発した。
「あのね。うちはあくまでパンダの研究機関だけど、いろいろやらされるわけね。この研究協会のビルに居候させてもらってるから」
もう一人の背広の小さな男が頷いた。この男はビルオーナーの『生きもの生態研究協会』の人のようだ。
司馬剣は、イエティの存在について語り始めた。
イエティは、全身を白い毛で覆われ頭の尖った大きな二足歩行の動物ということで、かつてはヒマラヤ山脈で何度となくその姿を目撃したとか、啼き声を聞いたとか、体毛を入手したなどと世間を騒がせていたが、研究が進み正確な情報が収集・分析されるにしたがって、現在ではそのすべてが熊や鹿の仲間などの誤認であるとの結論に至り落ち着いているという。
「しかしね。うちでは三年ほど前から別な場所での目撃情報に基づいて調査していて、このほど間違いなく誤認ではない確証を得ることができたんだ。我々は遂に知能の発達したイエティの集団を発見してしまったのだ」
司馬剣は一枚の写真をお尻のポケットから取り出した。
――どこから出してるのよ。もう少し、大切に扱ったらどうなの？

その写真は白い雪山に白い地面、白い吹雪でほとんど全部真っ白だった。
「これ、真っ白で何も見えませんが……どこかに写ってるんですか？」
「はい。いい質問です。イエティは写っていない。しかしここで発見された。そして足跡を追い彼らの集落へ辿り着いたのだ」
――この男の人、頭おかしいんじゃないの？
司馬剣は説明を続けた。
「発見された場所は、ヒマラヤ山中ではなく、かなり西に外れたヒンデゥークシュ山脈の山中だ。やはり四千メートル超級の山々の連なる山脈だ。
ヒンデゥーとはインド人、クシュは殺し屋。人殺しの山脈だ。かつて、ヨーロッパの人買いがインド人の奴隷女を買って、数多の奴隷がこの山を越えられず死んでいったんだ」
ぽんちゃんはそういう話は嫌いである。しかし、彼は続けた。
「アフガニスタンという国の国境は掌（てのひら）を『ぐー』に結んだ拳のような形のイメージがあるが、実はそこに小指を立てたような形をしている。その小指に当たる部分が北はタジキスタン、南はパキスタン、東の小指の先が中国に接する『ワハーン回廊』と呼ばれるところだ。その小指の先で我々はイエティの集団を発見したんだ」
拳だの小指だのと例えが飛躍しすぎていてぽんちゃんにはさっぱり意味が分からなかったが、その先の説明によると、どうやらイエティが発見された地域である、（彼曰く）『小指の先』辺りの中国側の領土内で、彼女は歹徒龍（ダイトゥロン）の一族とともに十二年間の軟禁生活を送らされていたらしい。
「我々は、中国から二グループ、日本から一グループ、計十五人の者がその地へ調査に行き、日本からのグループ五人がイエティとの遭遇に成功した。だが、実はその五人の内二人が戻ってきていない。これは決して外部に漏らすことのできない話だ」
ぽんちゃんはまたわけがわからなくなった。雪山から戻らなかっ

た人がいるのにどうしてそれを秘密にするのか……。
「無事戻ってきた三人の話に共通していることは、発見した時、イエティは九人で共同生活をしていて、火を使い、里の民家から奪ってきたと思われる鍋釜を使って食物を調理しているということだ。男は大きく力も強く部族以外の人間には攻撃的で乱暴であるという。大人とみられる約半数のイエティは包丁を全員持っていて、平気で人間を刺し殺す」

「あの。そんな危ないところに女の私を連れていっても、足手まといになるだけだと思いますど……」
司馬剣は顔を上げて大きな声で言った。
「そうか！　行ってくれるか。よし！」
ぽんちゃんは、しまったとばかり慌てた。
「ちょっちょっちょっと待って下さい。まだ私、行くとは言ってません」
司馬剣は思い出したように再び話し始めた。
「実は、ここからが、君に白羽の矢を立てた条件の二つ目に関係することなのだ。
イエティがどういう場面で人間を襲うのか。その状況が問題なんだ。何故かにこにこと笑顔を投げかけたり、笑ったりした時に、必ず怒ったような表情をして包丁を向けてくるというんだ。逆に悲しそうにしていると彼らは安心するようだ。
人間の笑顔というものは、相手に対する好意的な感情がベースとなって作られることが多いが、逆に相手に対する優越感によって作られる笑顔は時に人間の卑劣な本性をさらけ出すことがある。彼らイエティは過去、大切な仲間を傷つけられたり、殺されたりした時、その相手の表情が実に醜い卑劣な人間の笑顔であって、これが頭に焼き付いてしまっているのかも知れない。
我々が調査に乗り出すずっと以前からの言い伝えだが、当時イエティ狩りのようなことがあって、大勢の人間が少数のイエティを取

り囲んで撲殺したことがあったらしい。その時現場に隠れていてその後逃げ去ったイエティの何人かの子供が、今頃は二十歳くらいの大人になっていることになる。人間は撲殺したイエティの周りで大笑いをしながら酒を酌み交したという……」

「まあ。酷い……」

「いやいや、これはあくまで言い伝えであって本当のところはわからないが、ともかくイエティに対して笑顔が禁物であることはイエティに遭遇した者の証言から間違いない。そういう意味で、悲しい過去を持つ君が我々に同行することは意味があるのだ。通訳としては適任だと思うのだ」

司馬剣の思考はぽんちゃんにはいま一つ理解ができない。話がどうも飛躍し過ぎてると……。しかし、彼女は言うべきことは言わなければ、と思った。

「あの、私、確かに暗い過去を持っているって人によく言われますけど、そんなこと全く気にしていません。過去は私にとって終わったことですから。申し訳ないですけど、そのイエティ何とかと一緒にしないでいただけませんか？

私、そんなに性格暗くないですから……ていうか、笑っていることのほうが多いです、むしろ……。逆です、全然適任じゃないです」

司馬剣は、にやりとして首を横に振った。

「いいや。隠しても無駄さ。君みたいに暗い過去を背負っていて明るい性格の人間などいるわけがない」

ぽんちゃんはその言い方に少しムッとした。

「失礼ね！　ホントに落ち込んじゃうじゃないのよ！」

司馬剣はさらに追い討ちをかける。

「実は本当の君はとても暗い性格なんだ。君は自分に嘘をついていて、そのことに少しも気が付いていないだけなんだ。目を覚ましてくれたまえ」

「いったい何に目を覚ませってのよ！」
司馬剣は左の掌をもう片方の拳でポンと叩いた。
「そうだ！その怒りだ。暗い過去。暗〜〜〜〜い過去。それこそが君本来の姿だ」
「酷いわ。酷い！」
ぽんちゃんは怒りと悲しみの入り混じった感情を抑えきれず、俯いて膝の上に置いた手を震わせた。　辛い過去を常に記憶の奥にしまってしまう彼女であっても、『暗〜〜〜〜い過去』という言葉はさすがにこたえたのだ。
司馬剣ともう一人の男は顔を見合わせて、「その感じ。怒りと憂い。これだ！　俺たちの目に決して狂いはなかった！」
――そうじゃない！　私はそんなに暗くない！　過去なんて一切今の私に関係ないの！
ものの十秒も経たないうちにぽんちゃんは勢いよく髪をかき上げて、司馬剣を見つめ首を傾げて『あはっ』と笑った。
司馬剣は目をまん丸くし、隣の若い男は椅子からズリ落ちた。
ぽんちゃんは決して負けないのだ！

生誕の地へ

新東京国際空港を発った司馬剣とぽんちゃん、それにカメラマンの三人は、北京経由で中国四川省成都双流国際空港に降り立った。

ぽんちゃんに成都での記憶などある筈もないが、歹徒龍（ダイトゥロン）から自分がこの空港で拾われたと聞かされていたので、何だか妙に胸に込み上げるものを感じた。彼女の会うことのない両親への想いがそうさせたのかも知れない。

ぽんちゃんは今まで自分の世話をしてくれた何人もの大人との出会いと別れを繰り返してきたので、そういう人たちとは時が経てば必ず別れるものだと思っていた。それが『良い人』であれ、『悪い人』であれ、感謝の気持ちは忘れなかったが、未練を感じたり、回顧することはこれまでの彼女の中では有り得ないことだった。しかし、彼女はこの空港に降り立った時、初めて『親』というものの存在を意識し、自分なりに実感した。

司馬剣はここ四川省の出身で、雪山登山のエキスパートでもあり、かつては格闘家でもあったという。それなりの体格をしていたので、ぽんちゃんはまんざら嘘でもなさそうだ、と感じた。大熊猫繁育研究機関に入る前は何をしていたかとぽんちゃんが尋ねると、彼は一言、『格闘』とだけ言った。

三人はその日成都市内の観光ホテルに泊まり、翌早朝から司馬剣のレンタルした大型ＲＶ車で新疆ウイグル地区へと向かった。夕方一行はヒンドゥークシュ山脈の山麓で中国とアフガニスタンの世界一高いといわれる国境の近くに小さなテント村を作った。司馬剣のいうところの『小指の先』辺りである。　そして、番犬用に相当訓練されたという二匹の大型犬、シベリアンハスキーとセントバーナードを連れてきたので、犬小屋をそれぞれテント脇に組み立てた。

反対側の角には、かまどをこしらえて火を入れた。

接近遭遇

訓練された大型の番犬が二匹いるので、何かあっても吼えるし暴れるだろうからと、ぽんちゃんは少しも心配せずにテントの中で寝袋に入りすぐに眠った。ポジティブ思考の彼女ならではの徳である。対照的に隣のテントに入っていたカメラマンは寒さと恐怖でいてもたってもいられないらしく、持ってきたウイスキーをがぶ飲みし、飲み潰れて寝た。司馬剣はというと、無言で戦いの前の儀式のような妙な踊りをし、その後眠りについた。

現地での最初の一夜が何事もなく明けた。

辺りは一面の雪がきらめきを発して眩しい朝を迎えていた。

ぽんちゃんは早速テントから出てお化粧を始めた。雪を鍋に入れ融けたお湯で洗顔をする。その後たっぷりの化粧水で肌を充分潤わせてから、ベースファンデーションに粉おしろいを持ち出して丁寧に顔をはたいていた。

彼女の手に持たれたコンパクトの鏡に映った背後の雪景色。その中に確かに『それ』はいた。そしてどんどん近づいてくる。彼女は全身を硬直させながらも振り向いた。

彼女の背後二十メートルほどのところまですでに『それ』は来ていた。大きい。身の丈は二メートルを軽く超えているように見える。髪は白髪、いや、ぼさぼさの銀髪で胸の辺りまで伸びている。腰には厚い毛皮を巻いていて上半身は完全に裸だ。しかし銀色の胸毛が縦に太くつながっている。

――イエティ？

しかし、彼女が聞いていたイエティの姿とは相当に異なっている。尖った頭に全身真っ白な長い毛の動物。いえいえ、目の前の『それ』、いえ、彼はどこから見ても動物でなく人間だ。

彼はさらに近付いてきて、ついにはぽんちゃんの手の届くくらいのところまで来てかがんだ。彼女の手に持たれたコンパクトに興味があるようだ。ぽんちゃんは震えたまま動けない。
イエティらしき男は彼女のコンパクトを奪い、ぱたぱたぱたと粉の塊を砕いた。それを自分の雪焼けした顔に彼女がしたように塗ろうとしているに違いない。
そのとき脇から司馬剣の声がした。
「恐れるな！　笑うな！　そのままだ！」
ぽんちゃんは直立したまま声のするほうに顔を向けた。
――この状況で何で笑えるっての？　早く助けなさいよ！

イエティらしき男はおしろいのパフを突然、自分ではなくぽんちゃんの顔にはたいた。
ぱたぱたぱたぱた。ぱたぱたぱたぱた。
「ぶっ、ぶはあ！」
ポんちゃんの顔はとたんに眉毛も唇もなくなり真っ白になった。
「ごほん、ごほん」
おしろいにむせて鼻から粉を吹いているぽんちゃんの脇からまた声がした。
「よし！　いいぞ。ぶぶう。いやいかん。ぶぶう。笑ってはいかん」
ぽんちゃんは直立したまま真っ白い顔で助けを求めた。
カメラマンの姿も見えない。
そこへ別なイエティがうしろに現れた。いや、イエティではないかも知れない。ぽんちゃんと同じくらいの体格の女性だ。長い髪は顔の前で分けられることなく膝の辺りまで伸びているため、顔がまったく見えず、両方の乳房も隠れているが、明らかに体型が女性だ。そのイエティ女は、長い髪を少しよけて胸の乳首に指を当てた。
「君が女であるかどうかを訊いているんだ。ぽんちゃんもまねしろ！」司馬剣の声だ。
ぽんちゃんは分厚い防寒服を着ているので真似していることを相

手に意志表示するのは難しい。しかし自分の胸に指を当ててそれを示した。
「もっと下だ！」「いやもっとちょっと上！」
こんな時に、乳首の位置にこだわる司馬剣にぽんちゃんはわけがわからなくなってきた。ところが、さらに……。
「駄目だ。ぽんちゃん。位置が特定できない。君も脱ぐしかない！」
「ええっ？　寒いよう」
「言うことを聞け！」
「嫌よ！」
「早くしろ！」
そうこうしているうち、イエティ女がその場でぐるぐる回りだす。

「負けるな、お前は、そうだ、三べん回ってワンと言え！」
「ええっ？　勝ち負けとかあるの？！　しかも『わん』って何よ？」
「お願いだ。頼むから言うことを聞いてくれ。会話が成立するかどうかの瀬戸際なんだ」
ぽんちゃんが躊躇っていると、イエティ女が今度はこちらにお尻を向けて左右にゆっくり揺らした。
「いけるぞ！　お前は同じようにしてお尻ぺんぺんしてアッカンベーをするんだ」
「ええっ？アッカン……」
ぽんちゃんはここでイエティ女と勝負することの意味がさっぱりわからない。いや。そもそも、何の勝負なのかすらわからない。それは恐らくぽんちゃんでなくとも、その道の研究者である司馬剣以外、誰にもわからないだろう。
しかしその研究はかなりいい加減なような気もする。
いつまでも言われた通りにしないぽんちゃんにいらつき、司馬剣がぽんちゃんに向かって小さめのジェスチャーでお手本を示した。
「ぶっ。お願い。笑わせないで。でもちょっと。本当にそんなことして怒らない？」

「大丈夫だ。たぶん……。コミュニケーションを続けるんだ！」
「たぶんって……そんなあ」
ぽんちゃんはとうとう観念し、意を決した。言われた通り、お尻ぺんぺんしてイエティ女に向かって思いっきり『アッカンベー』をして見せた。しかも真っ白い顔で……。
イエティ女は一瞬にして顔色が変わった。いや、その前に先に姿を見せた巨人のようなイエティ男が激しい怒りを表情に表した。
そう。お尻ぺんぺんしてあっかんべーをされれば普通の人間でも怒る。
巨人のようなイエティ男は突然司馬剣の方へ突進し、彼を担ぎ上げた。もの凄い力だ。司馬剣は普通の人間よりかなり大きく体格もいい。それを一瞬のうちに持ち上げたのだ。
「助けてくれ！」
「待って！　どうしよう。そうだ犬だ！　犬がいた！」
しかし二匹の犬は横を向いていてイエティには関心がまるっきりなさそうだ。何を訓練されていたんだろう。
ぽんちゃんは頼りの犬の名前をきいていなかった。
「ちょっと！　そこの犬！」
ぽんちゃんの叫び声にも二匹の犬は伏せたまま、面倒臭そうに横目でちらっと見ただけだ。
ぽんちゃんは頭に血が上ったようにイエティ女を離れ、シベリアンハスキー犬の方に突進して尻尾を引っ張った。しかしその犬は不愉快そうに彼女を見ただけでまったく動こうとしない。
――駄目だ。どこが訓練されてるんだってのよう。何！　この馬鹿犬ども！
振り向くと司馬剣をかついだイエティはその場を去ろうと小走り

に離れていってしまっている。ぽんちゃんは必死だ。奇声をあげながら自分に関心をもたせようとしながら追いかける。このまま見失ってしまったらもう会えないかも知れない。
『もう会えなくても仕方がない』は今までのぽんちゃんの人生。しかしこのときのぽんちゃんは、またも、生まれて初めての気持ちを味わった。
――このまま彼とお別れなんて絶対にいやだ！
次の瞬間ぽんちゃんは叫んでいた。
「お願い！　司馬ブーを返して！」

司馬ブー、いや司馬剣は『降ろせ！　降ろせ！』とイエティの頭を渾身の力を込めて叩くが、石のように硬い頭は何のダメージにもなっていないようだ。
自分に関心を持たせるべく、ぽんちゃんはとうとう最後の手段に出た。
追いかけながらありったけの大きな声で突然笑い出したのだ。

「あっはははは。あはははははは～～。どうだ。笑ったぞう！　ははは。ばーか！　ははははは」

再びイエティ男の顔色が変わり足がとまった。
――しめた！　とまったぞ！
ぽんちゃんは笑い続ける。
「あはははは。あはははは。ほれほれ、ばーか」
突然担いでいた司馬剣を放り投げ、ぽんちゃんの方へ向き直った。
「ぐお～～」
そして全速力でぽんちゃんの方へ向かってきた。
「ええっ！　ちょっ、ちょっと待って！　うそうそ。本当は笑ってない。全然笑ってないのよね。ダメえ？　やっぱ、ダメよね。はは。キャーーー！」

逃げ回るぽんちゃん。追うイエティ男。いつの間にか、ぽんちゃんの走る先には数人のイエティが立ちはだかっていた。しかも手には全員包丁が握られている。ぽんちゃんは立ち止まった。

――ああ。もうだめだ。私、殺される！　でもまだ死にたくな～い！

きーー。ざざあ。

その時、大きな車が後ろからぽんちゃんの脇に停まった。

「乗れ！ぽんちゃん！」

司馬剣のＲＶ車だ。ぽんちゃんは開いた車のドアからシートに飛び込み、車は猛発進した。後ろの座席ではカメラマンが身をのりだしてシャッターを切りまくっている。その隣にはさきほどいたイエティの女がいる。

――助かった！

しかし、ぽんちゃんはまた、わけがわからなくなった。

――何でイエティの女がここにいるわけ？

熱愛飯店

カシュガル地区の地区首都カシュガル市内の小さな宿泊所。その名は『熱愛飯店』。狭いロビーの一人しかいない小さなフロントで司馬剣はチェックインの手続きをしている。端のベンチには、カメラマンが座っていた。

イエティ女は人目につくとまずいので、ひとまずぽんちゃんと一緒に駐車場の車の中にいた。

――司馬剣の奴。あいつ何考えてるんだろ。イエティ女、誘拐なんかして。それって絶対まずいでしょ。

やがてカメラマンが駐車場に来て目で合図し、早く早くと手招きをした。ぽんちゃんはイエティ女の手を引いて車から出ると、小走りに駐車場に面した裏口から客室の方へと向かった。

四人は、司馬剣とカメラマン、ぽんちゃんとイエティ女というように二部屋に分かれることになった。ぽんちゃんはイエティ女と同じ部屋で一晩寝泊りするのを一旦は拒否したが、二人の男と一晩過ごすのも別な意味で困るので、仕方なく受け入れた。

部屋に入る前に司馬剣はぽんちゃんに伝えた。

「今晩はここで体を休めろ。ただ、イエティ女が逃げないように注意してくれ。ドアの鍵はもともとかからないから、ぽんちゃんは扉の内側にベッドを移動してドアノブを腕に縛ってそこで寝るんだ。窓は小さくて体が通らないから大丈夫。明日は食事をせずになるべく早く出発する」

「何しに？　どこへ出掛けるの？」

「それは、明日行ってみればわかることだ」

「イエティのいるところは嫌よ！」

「同じ山脈の中ではあるが、昨日の国境付近から二十キロくらい北の方に離れたところだ。知り合いの学者に会いに行くんだ」

「……」

「だから、今説明してもお前にはわからないことだ。今日は、このパンと飲み物をお腹に入れて、早く寝ることだ」

再会

アルコールランプが二つ点いた薄暗い部屋で、ぽんちゃんとイエティ女はベッドに隣りあわせで腰掛け、固いパンをかじっていた。
先ほどは離れていて良く見えなかったが、イエティ女の乳房はかなり大きいようだ。ぽんちゃんは恐る恐るイエティ女の長い前髪に触れた。イエティ女はそれでも一言も発しないし、慌てた様子もない。ぽんちゃんは思い切ってイエティ女の前髪を左右に大きく割って顔と上半身を露にした。

――あっ。
ぽんちゃんは一瞬我が目を疑った。
イエティ女の左の乳房には、ジャイアントパンダの絵模様のタトゥーがぼんやりとだが彫り込まれていたのだ。乳頭をパンダの鼻に見立ててその上方に黒い目と黒い耳を二つづつ描いて丸で囲んだ、あのいい加減な絵模様だ。女の胸がとても大きく膨らんでいるため、もの凄い『下ぶくれ』のパンダである。
――ぶっ。いえ、笑ってる場合じゃない！
それはまさに、歹徒龍（ダイトゥロン）一族に連れ去られタコ部屋で育てられた女たちの共通の証だった。
ぽんちゃんは女の顔を見た。同じくらいの年頃の西洋系の顔立ち。そこにはみるみると懐かしい面影が浮かんできた。
「サリ！　あなたでしょ！　私、ミコよ。ミコ！　覚えてるでしょ！」
ぽんちゃんはあの時の『ウイグル語』で叫んだ。そして前をはだけて、パンダの絵模様のある自分の乳房を女にはっきりと見せた。しかし見せてみて少しの後悔を彼女は感じた。
――あれ？　サリに完全に負けたよ。くうぅ！
しかし、彼女のパンダも幾分下ぶくれになっていて、それは七～

八年の歳月と『女』を感じさせるに充分なものだった。
――だいたい、サリの成長が早すぎるのよ。うん。

女の顔は、はっきりとした驚きの表情になった。
――覚えている！　そう、サリが私のこと忘れるなんてこと、あるわけないわ。
しかし、彼女、サリはなお一言も発することはなかった。口は開いたが声が出ない。彼女は何らかの原因で言葉を失っているのだ。しかし、明らかに彼女の記憶にはぽんちゃんが残っていて、何だか嬉しそうな表情にも見える。
「サリ。私、あの時もう一生のお別れかと思ってた。また会えるなんて……。あなた、どうしてたのよう。イエティと一緒になんかいて……」
「ぐうう。ぐうう」とサリがはっきりと頷く。目が輝いている。その大きな目にやがて涙が浮かび、そして頬を一筋つたった。
「ねえ、泣かないでよ。私まで泣いてしまいそう」
――別れてから七年間とちょっと。私も色々あったけど。サリ、あなたの方がもっとずうっと大変だったみたいね。でも、もう大丈夫よ。もう泣かないで、サリ……。
「ぐうう。ぐうう」サリはぽんちゃんに抱き付いて、頭を彼女の胸に埋めてきた。
ぽんちゃんは、今晩、簡単には眠れそうになかった。

故郷の山々へ

翌朝四人は宿泊所を出て、司馬剣がレンタルしていたＲＶ車に乗り込んだ。サリは司馬剣が朝方早くに市場から食料と一緒に手に入れてきた衣服を身にまとっていたので、格好としてはさほどの違和感はなくなっていた。しかし、もともとの西洋系の顔立ちと赤毛の長い髪は人々の目をひくものであった。会計を済ませた司馬剣が最後に車に乗る際、宿泊所の従業員に行く手を阻まれ、大きな声で宿泊人数を誤魔化して逃げるつもりだ、と騒ぎだしたので、彼は仕方なく追加料金とかなりのチップのようなものを上乗せして開放され、ようやく車を走らせた。

車の中は皆、終始無言だった。サリもぽんちゃんと後部座席で無言のまま彼女の手をずっと握っていた。数時間走り続けて、車が高原地域の端、山の麓に着いた時にはすでに日が傾きかけていた。司馬剣は、山で知り合いの学者に会いに行くと言っていたが、それ以上のことは一切語ろうとしなかった。ぽんちゃんの方も異様に司馬剣が険しい表情をしているので、問う機会を失っていた。

司馬剣は、少し山を上がったところで車を停めた。そしてそこでカメラマンは皆と別れた。

――彼、日本から一緒に来たけど、もともとはこの辺りの地元の人だったのかなあ……。

司馬剣は、この先車道はなくなり岩場となるので歩いていく、と言った。

「どれくらい歩くの？」とぽんちゃん。

「かなり歩きにくいけど、距離的には四～五キロだから、二時間もかからないよ」

ぽんちゃんはもともと体力にはあまり自信がある方ではなかった

ので、かなり息を荒くしていた。ところが、サリはというと、彼女は驚くほど身軽だった。十二歳で別れる頃はぽんちゃんの方が遥かに機敏であったが、その後、サリの山での厳しい生活がこれを逆転させたのかも知れない。

司馬剣も巨体の割には身が軽く、ぽんちゃんは彼女に合わせてゆっくりめに歩いてくれている二人に付いて行くのがやっとだった。

泪澤（レイゾー）の谷

「ここは、『泪澤（レイゾー）』といわれるところだ。二人とも足元に気を付けながら、この右の下の方を見てみろ。そこは谷底まで何もさえぎるものがない断崖絶壁になっていて、過去においては何人もの人間が吸い込まれるように谷に落ちて行った」

「わあ、怖い！」

「ぽんちゃん。いや、華実。いや、ミコ。それからサリ。これから俺の言うことを良く聞くんだ」

――何で今さら『ミコ』なのよ。

「この先、指差す方向へまっすぐに行くと、丸太を積んだような一軒の家が建っている。お前らはそこに行って中の男に会うのだ。男は二人いる筈だ。あと、君たちの面倒は恐らくその男たちがみてくれるだろう」

ぽんちゃんは首を傾げた。サリはじっと司馬剣の方を見ている。

「ねえ。私たちの面倒をみるって、どういうこと？　あなたは、いったい何しにここへ来たの。その人に会いに行くんでしょ？」

「いや。俺はここで終わりだ」

ぽんちゃんはますますわけがわからなくなってきた。

「終わりってどういうこと？　私たちを置いて戻るって言うの？」

「俺はさっきのカメラマンと同じく、この辺りに住んでいた。今までの人生の総括だよ。人としての……」

「人生の総括？」

「わからなくてもいい。ともかくその家にいる男は君たちを何年も捜しに捜し続けてきた人間だ。君たちを待っている筈だからね」

「もっとちゃんと説明してよ。まったく意味わかんないよ」

「じゃあね……」

司馬剣は寂しそうにつぶやいて、そのまま右の方に歩いて行った。

そして二人の方に向き直るともう一度、今度は少し大きめの声で言った。
「じゃあね！」

司馬剣はそのまま後ずさりし、谷の方に消えた。

「きゃあああ！」
「ぎゃあああああ！」
二人ともが同時に叫んでいた。司馬剣が崖から落ちた。あまりに突然の出来事に二人はどうしていいのかわからなかった。その後突然目を覚ましたかのようにサリが崖の方に走っていった。
「あっ、危ない！　サリ！　止まって止まって！」
咄嗟にぽんちゃんはサリの足にタックルして彼女を倒していた。二人は崖縁で重なるように倒れた。
「やだあ、危ないよう。サリ。もう少しで死んじゃうところよ」
サリは真っ赤な顔をしていた。感情が昂ぶっている。サリは司馬剣とは知り合ったばかりであり、彼女の行動はぽんちゃんにとって異常としか思われなかった。
「駄目だよう。サリ。もう助からないよ。司馬剣は……」
司馬剣の落下は自殺だったのか、それとも足を踏み外しただけなのか、どちらとも言いようのない状況だった。しかし、彼の最後に残した言葉、『人生の総括、人としての……』は、ぽんちゃんの耳に強く残っていた。

「サリ。行ってみよう。この先の丸太の家」
「ぐう」
サリは今度は青ざめた顔をして頷いた。

歳月を超えて

その家は俗に言うログハウスに似たものだった。ぽんちゃんは、サリを随えてその入り口らしいところへ近寄って行った。

ギイイッ。

かんぬきを外しゆっくりと分厚い丸太の扉を開けた。

そこには、ボロをまとった一人の男が立っていた。年は五十歳台半ばくらいか……。金髪の白人男性である。彼の右手には短銃が握られ、銃口はぽんちゃんの方へ向けられていた。ぽんちゃんは慌てて両手を挙げてサリにも同じ格好をするよう目配せした。しかしサリはきょとんとしている。

男がたどたどしい英語訛りの中国語で話し始めた。

「君たちを連れてきた中国人の男はどこにいる」

「司馬剣のこと？　この先の崖から落ちたわ」

「シバケン？　日本犬？　犬の話ではない。歹徒龍（ダイトゥロン）のことだ。どこにいる」

「違うわよ。司馬剣って中国人。体の大きい人」

男はしばらく黙っていたが、短銃を降ろし、再び静寂を破った。

「君、その男は歹徒龍（ダイトゥロン）だ。彼の本名はたしか『司馬』という。日本語読みで『シバ』だ。その男は、歹徒龍（ダイトゥロン）本人に間違いない。彼は伝令を使って、私の娘を今日ここへ直接連れてきて会わせてやる、と言ってきたんだよ」

――ええっ！　司馬剣が歹徒龍（ダイトゥロン）？！　まさか……。私の知る歹徒龍（ダイトゥロン）はもっと怖い人。それに司馬剣みたいにデブじゃない。

しかし、考えてみるとぽんちゃんは、いつもサングラスに黒いマ

スクをしていた歹徒龍（ダイトゥロン）の素顔を見たことは一度もなかった。背丈は同じように普通の大人よりかない高い。もしかして……。

そして、ぽんちゃんの頭の中では、また、彼の最後に残した言葉、『人生の総括、人としての……』が響いた。

男は話を続けた。

「彼は、私や私の娘をはじめ、何人もの、何十人もの自由を奪い、人生を奪ったことに自ら報いる、と言っていた。私はどうせ悪党の話すことだ、また、金でも請求するに違いないと疑っていたんだ……」

男は二人に家の中へ入るよう促した。二人は中に入って、扉の前に並んだ。

「サリ、というのは君かい？」

男はサリに優しく話しかけた。

「……」

横からぽんちゃんが口を挟んだ。

「あの、この人サリです。間違いありません。私は十二歳まで一緒にいましたから。でもサリは今言葉がしゃべれません」

男は目を細めた。

「ああ。私の愛する娘、サリ。とうとう君に会えた。会えたんだ！」

ぽんちゃんがまた横から口を挟む。

「あの。私、ミコと呼ばれてまして。私のお父さんは……」

「ああ。サリ。こっちへおいで。私のサリ……」

また、横から……。

「あの。私のお父さん……」

男はサリを抱きしめながら、はっとしたように横目でぽんちゃん

の顔を見た。
「あの。私のお父さ……」
珍しくぽんちゃんの口はへの字になっていた。
男はぽんちゃんを奥の部屋へ案内した。
そこには、男の人がベッドの上に目を閉じて横たわっていた。
「昨日、いや、おとといの夕方だ。彼は亡くなった。君が私の娘とともにここへ連れて来られることを聞いていたから、まだそのままにしておいた。
彼は私と同じでこの十九年間、君のことを捜し続けていた。最後に君に会えると知って、私と一緒に歓喜した。三日前のことだ。
彼は四年くらい前から心臓に不整脈があって時々倒れることがあった。今回倒れた時は、二度と目を覚ますことがなかった。その前までは『会いたい、会いたい。僕は君を愛している！』と何度も言っていた。私の気持ちと同じだった」
ぽんちゃんは、初めて見る父親の顔を覗き込んだ。娘との対面を楽しみにしていた父は、気持ちをそのままに顔に表していた。ぽんちゃんは呆然としていた。ただ、悲しくも何もなかった。見たことも、話したこともない父親が死んでしまっても、彼女にとっては何の想いも浮かんでこないのだ。
しかし……。
ぽんちゃんは、生まれて初めて大きな声を出して泣いた。号泣した。
『僕は君を愛している！』という言葉は彼女が本人から聞かなくても、死者から聞こえてくる生れて初めての言葉だった。

男は彼女を見て、顔をゆがめ俯いた。ぽんちゃんは泣き続ける。

星の輝き

いつの間にか日がすっかり暮れていた。

家のすぐ外でざわざわと人の気配がする。サリの父親は短銃を手に取り、扉を少し開けて外を伺った。

――イエティだ。イエティの集団だ！

次の瞬間、サリの父親は家の外へ引き摺り出された。イエティの集団。その数、二～三十人はいる。　サリの父親はあっという間にイエティに取り囲まれた。最初にぽんちゃんたちが出会ったイエティの男たちとまったく同じ格好である。それらはどう見てもやはり人間にしか見えない。

驚いたサリは家の外へ機敏に飛び出した。イエティが一斉にサリの方に目をやる。

「がああああっ！」

サリが大きな声をあげた。イエティたちは途端に一人残らずその場に座り込んだ。その姿は、まるでイエティがサリにひれ伏しているようにも見えた。

そのあと、ふらふらとしながら家の中から泣き顔のぽんちゃんが姿を現した。ぽんちゃんは、サリよりもっと大きな声で号泣しだした。イエティは皆、真剣なまなざしである。その内一人のイエティが立ち上がって、ぽんちゃんに近付いてきた。そして、何とぽんちゃんを抱きしめたのだ。

「痛――――い！」

無論、イエティの力が強すぎるためだが、イエティにとっては、そんなことはお構いなしだ。

そのあとぽんちゃんは妙に可笑しくなって、ついに、イエティの

前では禁物であった『笑い』を犯した。
「あっはっははは！」
イエティたちは一瞬顔を曇らせたが、ぽんちゃんを抱きしめたイエティが同じように笑い出すと、他のイエティも次々に笑い出した。そして、その場は爆笑の渦になっていった。

辺りはすっかり夜の闇に包まれて空には星が沢山きらめいていた。

――この山、あの山、私の山。
そして、私を育ててくれた夜空のお星さまたち。
私は帰るの。あの山々へ。そして、あの空のお星さまのところへ。
それは、私を生んでくれたお母さんのいるところ。私のことを死ぬまで愛してくれたお父さんのいるところ。過去のお母さん、お父さんのところへ私は行くの。

『あなたは強い子でしょう。強く生きなきゃ駄目なの』
優しい女性の声がぽんちゃんの耳に響いたような気がした。彼女は、かつて耳にしたことのないその声の主が誰であるのかをはっきりと悟った。
――お母さん。私は強くなんかないの。私には生きていくための仕事もないの。悦びもない。ただ生きているだけ。生き甲斐のない人間。

『馬鹿だなあ……。生きることがお前の『仕事』なのだよ』
一つの星がきらっと瞬いた。
――お父さん？

ぽんちゃんは何気なくサリの方を見た。
サリは、ぽんちゃんに近付いてきて両手を差し出していた。

ぽんちゃんは、サリと一緒に星空を見上げて過ごしたあの日の晩のことを思い出した。

――あれはプロキオン。アルデバラン。そしてあの一番に輝く星がシリウス。天の狼の星。最高に輝く星。

――そして私たちのこと。いつもお星さまが見ていて味方してくださるのよ。

ぽんちゃんは笑った。

そして、サリも嬉しそうに微笑を返してきた。

――やっぱり、私には過去は関係ないの！　でも、サリ。あなたは昔からのお友達！

ポジティブ思考のぽんちゃんの本領は、まさにこれから発揮されるのだ。

こぼれんばかりの満天の星空から星が二つ流れていった。

『了』

星の輝き（後書き）

奪い取られた人生は、決してその人のもとへ戻ることはありません。

しかし、人はその人の『志』までは奪うことはできないのです。

失った人生があろうとも、心に星空さえあれば、人は前向きに歩んでいくことができるのです。

それは自然の力であったり、世を培ってきた先人たちの魂であったりするのかも知れません。

【華】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4700q/

こころの星空

2011年1月28日17時10分発行